

## 空車

森 鷗外

### 上

むなぐるまは古言である。これを聞けば昔の繪卷にあるやうな物見車が思ひ浮べられる。

總て古言はその行はれた時と所との色を帯びてゐる。これを其儘に取つて用ゐるときは、誰も其間に異議を挟むことは出来ない。しかしさうばかりしてゐると、其詞の用ゐられる範圍が狭められる。此範圍はアルシヤイスムの領分を限る線に由つて定められる。そして其詞は擬古文の中にしか用ゐられぬことになる。これは窮屈である。更に一步を進めて考へて見ると、此窮屈は一層甚だしくなつて

来る。何故であるか。今むなぐるまよと云ふ詞を擬古文に用ゐるには異議が無いものとする。ところで擬古文でさへあるなら、文の内容が何であらうと、古言を用ゐて好いかと云ふに、必ずしもさうで無い。文體にふさはしくない内容もある。都の手振だとか北里十二時だとか云ふものは、讀む人が文と事との間に調和を闕いてゐるのを感じずにはゐない。

此調和は讀む人の受用を傷ける。それは時と所との色を帯びてゐる古言が濫用せられたからである。

しかし此に言ふ所は文と事との不調和である。文自體に於ては猶調和を保つことが努められてゐる。これに反して假に古言を引き離して今體文に用ゐたらどうであらう。極端な例を言へば、これを口語體の文に用ゐたらどうであらう。

文章を愛好する人は之を見て、必ずや憤慨するであらう。口語體の文は文にあらずと云ふ人は姑く置く。これを文として視ることを容す人でも、古言を其中に用ゐたのを見たら、希世の寶が粗暴な手に由つて毀られたのを惜んで、作者を陋とせずにはゐぬであらう。

以上は保守の見解である。わたくしはこれを首肯する。そして不用意に古言を用ゐることを嫌ふ。

しかしわたくしは保守の見解にのみ安住してゐる窮屈に堪へない。そこで今體文を作つてゐるうちに、ふと古言を用ゐる。口語體の文に於ても亦恬としてこれを用ゐる。著意して敢て用ゐるのである。

そして自分で自分に分疏をする。それはかうである。古言は寶である。しかし什襲してこれを藏して置くのは、寶の持ちぐされである。縦ひ尊重して用ゐずに置くにしても、用ゐざれば死物である。わたくしは寶を掘り出して活かしてこれを用ゐる。わたくしは古言に新なる性命を與へる。古言の帯びてゐる固有の色は、これがために滅びよう。しかしこれは新なる性命に犠牲を供するのである。わたくしはこんな分疏をして、人の諂を顧みない。

下

わたくしの意中に言はむと欲する一事があつた。わたくしは紙を展べて漫然空車と題した。題し畢つて何と讀まうかと思つた。音讀すれば耳に聽いて何事とも辨へ難い。然らばからぐるまと訓まうか。これはいかにも懐かしくない詞である。その上輕さうに感ぜられる。瘦せた男が躁急、挽いて行きさうに感ぜられる。此感じはわたくしの

意中の車と合致し難い。そこでわたくしはむなぐるまと訓むことにした。わたくしは著意して此古言の帯びてゐる時と所との色を奪つて、新なる語としてこれを用ゐるのである。そして彼の懐かしくない、軽さうに感ぜさせるからぐるまの語を忌避するのである。

空車はわたくしの往々街上に於て見る所のものである。此車には定めて名があらう。しかしわたくしは不敏にしてこれを知らない。わたくしの説明に由つて、指す所の何の車たるかを解した人が、若し其名を知つてゐたなら、幸に誨へて貰ひたい。

わたくしの意中の車は大なる荷車である。其構造は極めて原始的で、大八車と云ふものに似てゐる。只大きさがこれに數倍してゐる。大八車は人が挽くのに此車は馬が挽く。

此車だつていつも空虚でないことは、言を須たない。わたくしは白山の通で、此車が洋紙を梱載して王子から來るのに逢ふことがある。しかしさう云ふ時には此車はわたくしの目にとまらない。

わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故に、人をして一層その大きさを覺えしむる。この大きい車が大道狭しと行く。これに繋いである馬は骨格が逞しく、榮養が

好いい。それが車に繋がれたのを忘わすれたやうに、緩ゆるやかに行く。馬の口を取とつてゐる男は  
 背せの直すぐ大男である。それが肥こえた馬、大おほきい車の靈れいででもあるやうに、大股おほまたに行く。  
 このをとこ  
 此男は左顧右眄さこいうへんすることをなさない。物ものに遇あつて一歩ぼを緩ゆるくすることをもなさず、一  
 歩きを急きにすることをもなさない。傍若無人ぼうじやくむじんと云いふ語ごは此男のために作つくられたかと疑うたは  
 れる。

此車このくるまに逢あへば、徒歩とほの人ひとも避よける。騎馬きばの人ひとも避よける。貴人きじんの馬車ばしやも避よける。富豪ふがう  
 自動車じどうしやも避よける。隊伍たいごをなした士卒しそも避よける。送葬さうさうの行列ぎやうれつも避よける。此車このくるまの軌道きだうを  
 横よこるに會あへば、電車でんしやの車掌しやしやうと雖いへども、車を駐とどめて、忍しのんでその過すぐるを待またざることを  
 得えない。

そして此車このくるまは一ひつ空車むなぐるまに過すぎぬのである。

わたくしは此空車このむなぐるまの行くに逢あふ毎ごとに、目迎めむかへてこれを送おくることを禁きんじ得えない。わた  
 くしは此空車このむなぐるまが何物なにものをか載のせて行くけば好いいなどとは、かけても思おもはない。わたくし  
 が此空車このむなぐるまと或物あるものを載のせた車をとを比較ひかくして、優劣いうれつを論ろんぜようなどと思おもはぬことも亦言またげんを  
 須またない。縦たとひその或物あるものがいかに貴たふとき物ものであるにもせよ。

(大正五年七月)